

# 日本人間工学会将来計画委員会報告書

平成 20 年 6 月

## 将来計画委員会

委員長 青木 和夫 (日本大学)  
副委員長 吉武 良治 (日本アイ・ビー・エム株式会社)  
委員 福住 伸一 (NEC 共通基盤ソフトウェア研究所)  
武藤 敬子 (東京電力株式会社)  
渡邊 政嘉 (経済産業省)

### 1. はじめに

学会の活性化と社会的貢献のために、学会活動や運営上の問題点を整理し、将来に向けての活性化の方策ならびに社会的ニーズに応えるための方策を検討して提言することを目的として本委員会が設置された。委員会では審議検討を行い、日本人間工学会の将来の活動について提言をまとめた。これらの提言を速やかに実行することを願うものである。

### 2. 委員会の開催

第1回 平成 19 年 8 月 1 日 (水) 13:00~15:00 日本大学理工学部  
第2回 平成 19 年 9 月 27 日 (木) 15:00~17:00 日本大学理工学部  
第3回 平成 19 年 10 月 15 日 (月) ~30 日 (火) メール会議  
第4回 平成 20 年 5 月 メール会議

### 3. 審議の経過

第1回委員会で各委員より学会の現状と問題点について意見を提出し、意見を交換した。次にこれらの問題点をふまえた上で、各委員が学会活性化の提言を提出した。これらの提言案について第2回委員会で逐一検討を行った。この議論を踏まえて委員長が提言案をとりまとめ、メールによる第3回委員会にて委員の意見を交換した。最終的な報告書案は委員長が作成し、メールによる第4回委員会にて承認された。

### 4. 提言の骨子

委員会による検討の結果、3つの目的、17項目の行動目標、58項目の具体的行動を提言としてとりまとめた(別紙一覧参照)。

#### (1) 目的

審議の結果、58項目の具体的行動を取り上げ、これを17項目の行動目標としてとりまとめた。提言としては17項目の行動目標だけでもよいかと思われたが、学会組織を運営する立場からはさらに上位の目的があったほうが理解しやすいと考え、以下の3つの目的に整理した。

1. 積極的に社会との関わりを持つ(社会ニーズに応える)
2. 会員サービスの質と量を向上させる
3. 組織を強化し活性化する

#### (2) 行動目標

上記の目的を達成するための行動の目標として、

1. 積極的に社会との関わりを持つ(社会ニーズに応える): 7項目
2. 会員サービスの質と量を向上させる: 4項目
3. 組織を強化し活性化する: 6項目

の計17項目を行動目標としてまとめた。

#### (3) 具体的行動

上記の各行動目標について、具体的に取り組むべき行動を整理し、合計58項目の具体的行動が挙げられた。

## 5. 提言の内容

### [1] 積極的に社会との関わりを持つ（社会ニーズに応える）

人間工学は人間と人工物や環境との関わりを解明する学問であり、その成果は現実の社会に適用されることによって学問の有用性も評価される。しかしながら、科学的な研究と現実の社会での応用の間にはギャップがあり、人間工学が社会でほんとうに役に立っているという実感をもつに至っていないのが現状であると考えられる。そこで、社会で必要とされる人間工学的ニーズを把握し、人間工学を積極的に社会に応用することを促進するために以下のような行動目標と具体的行動を提言する。

**(1)社会に提言する：**学会から社会に向けて働きかけるために次のような行動を提案する。

- ①各分野の人間工学ガイドライン作成
- ②人間工学チェックリストの改訂
- ③人間工学的配慮のある公共物の表彰
- ④使いやすさに関する提言・警告

**(2)人間工学知識を普及させる：**様々な分野で人間工学という用語が使われているため、誤解が生じている場合もある。学会として人間工学に関する正しい情報を提供する必要がある。

- ①小中学校での人間工学スクール実施
- ②「人間工学的配慮」の定義作成
- ③人間工学基礎講座のシラバス作成

**(3)コンサルティングを行う：**学会事務局には人間工学に関する問い合わせや相談が寄せられるが、現在は個人的な対応に頼っているため、組織的に積極的に対応する必要がある。

- ①人間工学コンサルティング窓口を設ける
- ②認定人間工学専門家の活用

**(4)成果をアピールする：**人間工学を具体的に見える形で発表することが必要である。

- ①人間工学デザイン賞の設置
- ②成功事例の広報・学会発表

**(5)国等へ働きかける：**人間工学を国家政策の一つとしてとりあげるよう働きかける

- ①国の審議会等への人材派遣
- ②科学研究費の分類に人間工学を入れる

**(6)企業へ働きかける：**人間工学実践の場としての企業の実績を広く知ってもらおう

- ①大会における実践報告セッション
- ②企業等の実践事例の表彰

**(7)マスコミへ働きかける：**事故や話題性のあるテーマに関して人間工学が果たしている役割をマスコミを通じて国民に広く知ってもらい、興味を持ってもらう

- ①安全に関する提言（事故等へのコメント）・警告
- ②無料大会参加券の発行

### [2] 会員サービスの質と量を向上させる

現在の学会活動の問題点として、大会への参加が少ない、盛り上がり欠ける、発表を聞いても役に立つものがない、学会誌を読まない等の意見が出された。参加者が急激に増加している学会や分野などもあることから、学会員が積極的に学会活動に参加するためには、学会員のニーズに合った活動を行ってゆくことが必要であると考え、以下のような行動目標と具体的行動を提言する。

**(1)大会に多数参加してもらう：**大会の発表が魅力的であると同時に，参加しやすい条件を整える．学会参加が重要な業務であることを企業に認識してもらうことや，若手の会員は休日は家庭で過ごすことが重要であることを考慮する必要がある．

- ①大会の平日開催
- ②企業からの実践例の発表セッションを設ける
- ③大会セッションの編成の見直し
- ④若手優秀発表の表彰
- ⑤大会に課題セッションを設ける

**(2)読みたい学会誌を発行する：**多くの会員の興味をひくために，原著論文以外の記事の掲載が必要であり，購読や検索の利便性を考える必要がある．

- ①タイムリーな特集・解説記事等の掲載
- ②部会・委員会等の報告記事掲載
- ③学会誌（論文誌）の電子ジャーナル化
- ④人間工学に基づいた製品・システムの解説

**(3)会員とのコミュニケーションを良くする：**学会と会員または会員同士のコミュニケーションを盛んにするための方策が必要である．

- ①ニューズレター
- ②メールマガジン
- ③満足度調査の実施
- ④交流ページ・ブログ
- ⑤ホットな話題のシンポジウムの開催

**(4)会員を表彰する：**会員の研究発表する意欲を向上させる

- ①若手会員の研究表彰
- ②人間工学教育賞
- ③継続会員の表彰
- ④学会活動の表彰

### [3] 組織を強化し活性化する

様々な学会活動を企画運営しているのは，大会や理事会，委員会，支部，部会などの委員やメンバーなど数多くの会員である．本学会では長期にわたって同じ役員を務める例も多く，活動に変化が少ないことも問題点としてあげられた．また，若い年代の意見を取り入れたり，活動に参加してもらうことによって後継者を養成することも必要であると考えられる．

一方，人間工学は様々な分野に亘って横断的に用いられる学問であり，人間工学に関する研究部会や活動が行われている他の学会も数多く存在する．そこで，このような他の学会に所属している特定分野の人間工学研究者，実践者と積極的に連携を行うことが，学会組織を強化することになると考える．また，現在の学会事務局は経費等の問題から事務局員の雇用に関して不十分な状況にある．以上のような点を考慮して以下のような行動目標と具体的行動を提言する．

**(1)他学会と連携して活動する：**他学会に所属して人間工学に関連した研究や業務を行っている人たちも日本人間工学会の活動に参加してもらうとともに，日本人間工学会からも他学会の活動に参加する等の連携が必要である．

- ①講演会等の共催
- ②他学会の人間工学関連会員・部会との交流
- ③他学会に無料参加券を配布・参加割引
- ④連合大会の開催
- ⑤認定人間工学専門家に他学会からも受験してもらう
- ⑥他学会（誌）への情報発信

- ⑦横幹連合の活用
- ⑧日本学術会議の活用

**(2)組織を若く保つ**：若手の会員の意見を活動に反映するとともに、活動に積極的に参加してもらう。

- ①役員再任の制限（会長の任期制等）
- ②若い人を役員にする
- ③人間工学アクティビティ賞
- ④「若手の会」
- ⑤会議の平日開催

**(3)役員組織を活性化する**：学会長がビジョンを明確にしたり、学会外部の意見を採り入れる制度を作る。

- ①会長を立候補制とする
- ②会長の産学交替制度
- ③外部役員（他学会）を導入

**(4)支部組織を強化する**：会員の地理的な偏在が大きな問題であり、支部の存在意義の確認や支部区分の見直しも必要。

- ①支部の区割りの見直し・支部連携
- ②支部活動のビジョンの作成

**(5)部会を再編成する**：研究部会が会員からの申請によって設置されているが、学会にとって必要な部会を理事会側から提案することも必要。

- ①技術戦略に沿った部会編成
- ②部会新設を理事会側から提案する

**(6)事務局機能を強化する**：職員の常勤化によって事務局の機能を高め、事務局員の能力向上をはかる

- ①雇用条件の改善
- ②OJT(On the Job Training)の強化
- ③電話会議・Web会議

## 5. 今後の課題

今後の課題として、実行の優先順位の決定、実績の評価の方法などの検討が挙げられた。また、渡辺委員からは今般の検討に際して、諸学会とのディスカッションをもとに様々なアイデアをまとめた、「人間工学会活性化アクションプラン（渡邊試案）」が提言されたので参考資料として添付した。

資料（議事録）

参考資料（渡辺委員から提言（日本人間工学会活性化アクションプラン（渡邊試案）  
～たこつば文化の打破と社会への智の還元～）

(別紙) 学会の活性化と社会的貢献のための提言一覧

目的	行動目標	具体的行動 (*は重複項目)	備考
1. 積極的に社会との関わりをもつ (社会ニーズに応える)	(1)社会へ提言する  (2)人間工学知識を普及させる  (3)コンサルティングを行う  (4)成果をアピールする  (5)国等へ働きかける  (6)企業へ働きかける  (7)マスコミへ働きかける	①各分野の人間工学ガイドライン作成 ②人間工学チェックリストの改訂 ③人間工学的配慮のある公共物の表彰 ④使いやすさに関する提言・警告  ①小中学校での人間工学スクール実施 ②「人間工学的配慮」の定義作成 ③人間工学基礎講座のシラバス作成  ①人間工学コンサルティング窓口を設ける ②認定人間工学専門家の活用  ①人間工学デザイン賞の設置 ②成功事例の広報・学会発表  ①国の審議会等への人材推薦 ②科学研究賞の分類に人間工学を入れる  ①大会における実践報告セッション(*) ②企業等の実践事例の表彰  ①安全に関する提言(事故等へのコメント)・警告 ②無料大会参加券の発行	
2. 会員サービスの質と量を向上させる	(1)大会に多数参加してもらう  (2)読みたい学会誌を発行する  (3)会員とのコミュニケーションを良くする  (4)会員を表彰する	①大会の平日開催 ②企業からの実践例の発表セッションを設ける(*) ③大会セッションの編成の見直し ④若手優秀発表の表彰 ⑤大会に課題セッションを設ける  ①タイムリーな特集・解説記事等の掲載 ②部会・委員会等の報告記事掲載 ③学会誌(論文誌)の電子ジャーナル化 ④人間工学に基づいた製品・システムの解説  ①ニュースレター ②メールマガジン ③満足度調査の実施 ④交流ページ・ブログ ⑤ホットな話題のシンポジウムの開催  ①若手会員の研究表彰 ②人間工学教育賞 ③継続会員の表彰 ④学会活動の表彰	
3. 組織を強化し活性化する	(1)他学会と連携して活動する  (2)組織を若く保つ  (3)役員組織を活性化する  (4)支部組織を強化する  (5)部会を再編成する  (6)事務局機能を強化する	①講演会等の共催 ②他学会の人間工学関連会員・部会との連携 ③他学会に無料参加券を配布・参加費割引 ④連合大会の開催 ⑤認定人間工学専門家に他学会からも受験してもらう ⑥他学会(誌)への情報発信 ⑦横幹連合の活用 ⑧学術会議の活用  ①役員再任の制限(会長の任期制等) ②若い人を役員にする ③人間工学アクティビティ賞 ④「若手の会」 ⑤会議の平日開催  ①会長を立候補制とする ②会長の産学交替制度 ③外部役員(他学会)を導入  ①支部の区割りの見直し・支部連携 ②支部活動のビジョンの作成  ①技術戦略に沿った部会編成 ②部会新設を理事会側から提案する  ①雇用条件の改善 ②OJTの強化 ③電話会議・Web会議	

## (資料) 議事録

### 日本人間工学会第1回将来計画委員会議事録

日 時：2007年8月1日（水）13:00～15:00

会 場：日本大学理工学部9号館 9122 教室

出席者：青木和夫（委員長）、吉武良治（副委員長）、武藤敬子、福住伸一、渡邊政嘉、斉藤進（オブザーバ）

資 料：

1. 日本人間工学会第17期(2007年4月～2010年3月)の活動目標について
2. 将来計画委員会（日本人間工学会平成19年度総会資料の事業計画）
3. 社団法人日本人間工学会の在り方に関するアンケート調査・集計
4. 「人間工学技術戦略ロードマップ」づくり協力のお願ひ
5. 人間工学技術戦略ロードマップ（2006年6月28日）

議 事：

1. 委員自己紹介。委員及びオブザーバの自己紹介があった。
2. 学会長あいさつ  
斉藤学会長から学会の活動目標（資料1）に基づき、以下の内容のあいさつがあった。
  - ・産官学，若手，女性の委員構成となったことはすばらしい。
  - ・社会常識としての人間工学をめざしたい。
  - ・委員会の課題は，(1)組織をどうするか，(2)事業で何を行うかの2点である。
3. 学会の現状と問題点等  
斉藤学会長からアンケート結果について説明があった（資料3）。渡邊委員から技術戦略ロードマップについての説明があった。経済産業省のホームページよりダウンロード可能である（資料2）。  
その後、自由に意見交換を行った。その概要は以下のとおりである。
  - ・（渡邊）基礎系学会で企業会員が減少している。ロボット学会などは景気がよい。産業界では学会参加のメリットがみえなくなっている。学会に参加することで、企業では解決できないことがみつかることを期待している。ホットな研究の中身を知りたい。
  - ・（武藤）ヒューマンエラーについては、現場までブレークダウンした防止技術のヒントを期待している。事故の防止法については藁をつかみたい場合がある。実際にやってみた経験の発表が聞きたいが、発表の場がない。
  - ・（青木）日本公衆衛生学会では、現場の保健師の「実際にやってみた」内容の発表が多い。
  - ・（渡邊）大会のプログラムの立て方、グループ化に問題はないか？古い分類のままでは？
  - ・（斉藤）日本産業衛生学会、全国産業安全衛生大会ではホットな話題が提供されている。
  - ・（吉武）実践事例は発表しづらいと感じている人が多いのではないか。
  - ・（福住）研究論文を主とすると学会に入りにくい。ヒューマンインタフェース学会では研究論文だけでなく、事例を雑誌に載せることにしている。また役員の半数は企業に所属する会員からということで、企業が関係している学会となっている。大会が土日にあると企業人は参加しにくいいため、平日のほうが望ましい。
  - ・（斉藤）国際学会で日本人の発表を見ていると真面目すぎる。もっと気楽に発表してはどうか？→（福住、吉武）国際学会で発表するにはきちんとした内容でないと社内を通らない。国内なら大丈夫だが。
  - ・（吉武）多くの関連学会があるので、他の学会との棲み分けを考えることも必要である。
  - ・（渡邊）総合した答が出ないことが問題である。具体的な答を出す必要がある。人間工学会は歴史的には労働衛生と生理学が主体で基礎系である。人間工学を中心として、ロボット学会などと連携して、例えば生活支援連合大会のような連合大会を開いてはどうか？

- ・(青木) 他学会の中(例えば建築学会や機械学会)の人間工学関連部門との連携が必要。
- ・(渡邊) 人工知能学会には若い人や女性が多かった。
- ・(吉武) 若い人の入りやすい学会にする必要がある。学会員の在籍年数(学会年齢)はどのくらいか?
- ・(渡邊) 若手が入るのは技術領域によるかもしれない。学会内に新しい領域のグループができて、学会から出ていってしまう。
- ・(福住) 大会発表のグループ分けを、技術領域ではなく適用領域ごとに分類してはどうか?
- ・(斉藤) 物や対象を中心とした分け方が必要である。
- ・(渡邊) 他学会の共通領域と共同で会合を開いてはどうか。その場合、ただ集まるだけではなく、テーマを設定した問題解決型であると効果的であろう。表彰制度を拡充(企業活動や製品に対して)することで、人間工学の取り組みを進める学会員の側面を支援を行うべきではないか。若手会員がホットなテーマの研究部会を作るにはどうしたらよいか。そのためには、部会活動は原則自主運営となっているが、人間工学技術戦略にそった再編や部会間の連携も含めて検討する必要があるのではないか。
- ・(青木) 現在は申請にもとづいて部会を作っているが、学会が主導して部会を作ってはどうか?

この他、会員の平均年齢や会員歴の調査をしてはどうかという意見も出たが、あまり有用ではないかもしれないということで、調査は保留となった。

#### 4. 今後の活動方針と具体的方法について

- ・最終目標は学会に提言を提出することとし、提出期日は2008年3月の理事会とする。

#### 5. その他

- ・次回開催日は10月3日(水)12:30~14:30とする。昼食は各自持参する。
- ・委員は各自5項目以上の改善案を8月10日までに青木まで送ることを宿題とする。

(文責:青木)

## 日本人間工学会第2回将来計画委員会議事録

日 時:2007年9月27日(木)15:00~17:00

会 場:日本大学理工学部9号館医療・福祉工学専攻会議室

出席者:青木和夫(委員長),吉武良治(副委員長),武藤敬子

資 料:

1. 第1回宿題一覧
2. 各委員よりの学会活性化への提言
3. 子どもに人間工学を!(斉藤進学会長)

議 事:

1. 提言について1つずつチェックしながら討論を行った。議論のとりまとめは委員長に一任された。(会議後別紙のとりまとめ案を作成した)
2. その他
  - ・次回会議日程は改めて調整を行って決める。

(文責:青木)

(参考資料) 本資料は、将来計画委員会報告書とりまとめの過程で委員の試案として提出されたものです。

## 日本人間工学会活性化アクションプラン (渡邊試案) ～たこつば文化の打破と社会への智の還元～

平成19年8月12日作成  
平成20年5月12日改訂  
平成20年6月28日改訂  
将来計画委員会委員 渡邊政嘉

### (基本原則)

学会財政負担を最小限とし、できることはすべてやり、頑張る人を組織として応援する。

### (目標1) 社会の信頼を得る研究コミュニティへの脱皮しよう！

#### アクション1 研究成果を社会に還元する

現在までに取り組みられてきた研究成果をわかりやすく広く社会に知らしめるとともに、これからの活動の目標を設定し、それに向けた活動を活性化する。

#### (現在までの学会員の研究活動成果をPR)

- ✓ 人間工学研究の成果が社会で役に立っている事例（(例) 企業の取り組みや工夫、産学連携による成功例、人間工学技術戦略の取りまとめ及び公表、会員のISOやJIS等の提案や策定等とりまとめへの貢献等）を取りまとめて公表する（学会誌（学会内部）、ウェブ（学会内外）での公表、出版、アウトサイダー向けに情報発信をすることが重要（他学会誌や、人間生活工学研究開発センター等人間工学関連の公益法人広報誌、工業会機関誌、新聞等への連載コラム、雑誌等へ学会による組織的な提案を行い定期的な情報発信）

#### (今後の活動を積極展開)

- ✓ 社会ニーズの発掘とその解決に向けた新たな共同研究の着手（例えば、政府や企業への研究提案活動を積極化（この際には、他学会や産業団体とのコラボレーションを積極検討）

### (目標2) 自分のからを打ち破って外の知恵と融合させることで人間工学の幅を広げよう！

#### アクション2 研究者コミュニティを広げる

人間工学技術戦略に示された研究領域の課題を解決するためには、現在の学会員の力だけでは解決が困難な課題が山積している。他の関係学会との情報交換や共同研究等のコラボレーションを積極的に展開する。

- ✓ 他の学会との連携（関係学会を巻き込んだ人間工学横幹連合の発足を検討し、実質的な日本人間工学会員の倍増）  
（※）求心力を何に設定するかは要検討。例えば人間工学技術戦略のロードマッピング活動をコアにすることで研究活動の相互の活性化を図ることを提案することはできないであろうか。
- ✓ 人間工学以外の他学会との共同連携活動の強化、日本機械学会、化学工学会、ロボット学会等とのコラボレーションを強化。
- ✓ 年会は原則単独開催とはせず、必ず他の学会との合同開催を検討。  
（※）まずは、人工知能学会、ヒューマンインタフェース学会、日本ロボット学会等比較的近い研究領域からスタート。相互の学会参加者は、当面参加費用を減免することで参加を呼びかけ、まずはこちらの世界を知ってもらう、また相手の世界をよく知る活動を早急にスタート。できれば合同企画シンポジウムを開催することで具体的なディスカッションをし、さらには学会誌等で成果を記録として残し蓄積させることが大切。



**(目標3) がんばっている人を勇気づけよう！**

**アクション3 表彰制度の積極的活用する**

研究活動と学会活動の活性化には表彰制度の積極活動が効果的である。現在の表彰制度に加えて以下の新たな表彰制度の創設を含めた抜本的な表彰制度の見直しを提言する。①研究領域における表彰の拡充し、②企業活動における人間工学の取り組みに対する表彰、③若手に対する表彰、④産学連携活動に対する表彰、⑤研究以外の学会活動への積極的貢献に対する表彰制度の創設を検討する。

- ✓ 企業活動における人間工学の取り組みを表彰する制度を検討する。  
(※) 審査基準を明らかにし、それに照らした活動の実績を応募者から説明させる方式、表彰状や盾等の作成に最低限の費用は応募者から徴収。基本的には表彰を前向きに表彰する方向で審査を実施する。人間工学実践者が企業内でのステータスアップ、経営層の認知度の向上につなげる。)
- ✓ 研究活動に対する表彰の幅を広げ、若手の先進的な研究テーマに対して、今後の可能性を表彰するような表彰制度創設を検討する。
- ✓ 産学連携活動は、大学等研究機関の外部資金調達を実現するとともに、研究活動の成果を産業界に還元できる早道である。人間工学の社会への智の還元を考えたとき、これらと取り組みを表彰によって広く社会に知らしめることは人間工学の価値を高めることにつながる。
- ✓ 研究のみならず学会活動への積極的な取り組みを進める会員に対しても学会活動貢献表彰の創設を検討する。研究成果絶対主義によらない学会活動への貢献度を評価すべきではないか。ソムリエの世界でもワインを世界に広める「名誉ソムリエ」があるように、国内外の著名人に人間工学の意義と価値を広く伝えてもらうことなどを目的に、現職の人間工学専門家以外の人で、人間工学の普及に努めた人などに人間工学会が名誉人間工学専門家の称号を授与する制度を検討すべきではないか。大手企業の技術部門のトップにこのような称号を授与できれば、企業内活動でもより人間工学に対する認識が広がる効果も期待できる。

**(目標4) 一人一人の学会員が当事者意識をもって学会運営への参加をできる扉を開けよう！**

**アクション4 産学が力を合わせて、将来を見据えた開かれた組織をつくる**

- ✓ 会長の実質任期制（1～2年）を導入し、大学等研究機関出身者と産業界出身者の一期ごとの交代を実践する。また、前期の副会長を次期会長最有力候補として任命し、常に産学一体になった学会運営に責任をもつ体制を構築する。
- ✓ 外部役員を入れることで他学会との連携及び他学会努力工夫を取り入れる（例えば自動車技術会、化学工学会、ロボット学会等から）。
- ✓ 役員に任期制を導入する（国際対応、標準化対応等、学会内での裾野をより広げる）。
- ✓ 支部活動の活性化（今後数年間の活動ビジョンを作成してもらい、その実践をエンカレッジする取り組みを行う。支部での活動実績のあまりない支部は、他の関連学会とのコラボによって活動基盤の裾野を広げることを検討する）。
- ✓ 人間工学技術戦略の柱に沿った部会の再編を行う。
- ✓ 現役学生のみから構成される若手委員会を組織し、学会改革や新しい研究分野に関する提言をもらう、その際活動の成果をかならず年会で発表する（表彰制度との組み合わせを検討）する。

**(目標5) 参加したくなる魅力ある年会にしよう！**

**アクション5 他の学会員等からも気になるテーマを設定し、呼び込む仕組みをつくる**

- ✓ 年会の演目構成を人間工学技術戦略の重点項目にそって再編成する。また、他の学会の関

- 係者の発表をかならず組み込む。
- ✓ 現役学生のみから構成される若手委員会を組織し、学会改革や新しい研究分野に関する提言をもらい、その際活動の成果をかならず年会で発表する（表彰制度との組み合わせを検討）する。
  - ✓ 他学会（含むマスコミ）に参加費無料で参加できるようなバウチャーを相互の学会で配布し相互交流をできるような仕組みを検討する。

**（目標6） 人間工学に関わる若手人材等をどんどん育成しよう！**

**アクション6 若手が元気になるような仕組みをつくる**

- ✓ 組織的に、初等中等教育への普及、啓蒙活動を行う（財源は、文部科学省や産業会等からの調達を要検討）。
- ✓ 人間工学専門家資格制度を他学会でも本当に使ってもらえるようにするにはどうしたらいいかの検討を他学会のメンバー合同で行う。
- ✓ 大学卒業後に継続して3～5年間会員であり続けることによる表彰制度を創設することで定着率を高めるインセンティブを付与できないか。

**（目標7） 政策の現場へも情報発信をしよう！**

**アクション7 国の審議会等へ乗り込もう**

- ✓ 経済産業省、文部科学省、国土交通省、厚生労働省等の政府との窓口となる担当理事を決め各省庁の人間工学支援部署を特定しネットワークを強固にする。
- ✓ 国の審議会等に組織的に人の推薦を行う（方法、現在委員になっている先生方をつてに新たな委員会の設置や交代等の時につながるようなコネクションをつける（まずは学会員がどのような委員会に所属しているかをリスト化するところから始める））。

以上